
1980年代のアメリカ陸軍指揮幕僚大学における教育改革 —— 学究と思索を重視する教育への変革はどのように成し遂げられたのか ——

木下 幸祐

<要旨>

ベトナム戦争後のアメリカ陸軍は、軍のプロフェッショナル化を目標とした陸軍改革を開始した。この改革のなか、将来を嘱望された若手少佐たちが学ぶ指揮幕僚大学の教育は、1980年代の初めから終わりまでの期間をかけて、一見するとプロフェッショナルとは無縁であるように思われる、学問的な方法にしたがいがながら戦争や軍事力の行使について思索させることを重視する教育へと改められていった。そうした学究と思索を重視する教育は、卒業後の職務で役に立つ知識や技術を授けることに専念していた1970年代後半の教育とまったくの別物であった。

本稿は、そのような抜本的な教育改革のなかで、学究と思索を重視する教育がどのような教育の理念に支えられながら、あわせてどのような改革の方法によりながら指揮幕僚大学に行き渡り、そして定着していったのかを明らかにする。

序論

ベトナム戦争後から始まったアメリカ陸軍の改革では、軍人一人一人の能力を覚醒させ、これによって軍をプロフェッショナルな個人の集団へと成長させていくことが喫緊の課題となった¹。これは、ワルシャワ条約機構軍に対する兵力量と兵器性能の両面での形勢不利を能力の高さで補うためであった²。そうした改革のなかでとりわけ重

1 1973年、徴兵制が廃止され、アメリカ軍は兵力維持に困難をきたした。このため、志願兵の部隊を中核としながら予備役を十二分に活用することにより、小規模かつ高品質の軍に作り替えることが改革の方針となった。この方針は「トータル・アーミー (Total Army)」構想と呼ばれた。松岡完『ベトナム症候群——超大国を苛む「勝利」への強迫観念』(中央公論新社、2003年) 28-33、162-165頁。

2 1970年代の中盤には、ワルシャワ条約機構軍は、伝統的に優勢であった兵力量のみならず兵器性能の面においてもNATO軍を上回るようになっていた。これに対してアメリカ陸軍では、同じ頃、国防予算の削減を受けて、兵員や装備品の充足率低下、ならびに装備品の不稼働と旧式化が進んでいた。アメリカ陸軍がワルシャワ条約機構軍と同等以上の兵力や高性能兵器を投入できる見込みは無かった。Frank N. Schubert and Theresa L. Kraus, eds., *The Whirlwind War: The United States Army in Operations Desert Shield and Desert Storm* (Washington, D.C.: GPO, 1995), pp. 25-26; The International Institute for Strategic Studies, *The Military Balance 1979-1980* (London: The International Institute for Strategic Studies, 1979), p. 110; U.S. Bureau of the Census, *Statistical Abstract of the United States: 1978 (99th edition)* (Washington, D.C.: GPO, 1978), p. 370.

要と考えられていたのは、これから先の数年間では陸軍改革の原動力となり、そして将来には将官となって陸軍を背負って立つことになる若手少佐を選抜して教育するアメリカ陸軍指揮幕僚大学 (U.S. Army Command and General Staff College: CGSC) の改革であった³。

なかでも1980年代に行われたCGSC改革では、それまでの教育が抜本的に改められ、そして、新しい教育が制度化された。1970年代の終わりまで、CGSCでは卒業後の職務で役に立つ知識や技術を教え込むことが何よりも重視された⁴。ところが1980年代に入ると、そうした実用に向けた教育に代わって、学問的な方法にしたがいながら戦争や軍事力の行使について思索させることを重視する教育（以下、「学究と思索を重視する教育」と表記）が中心を占めるようになった⁵。その後、学究と思索を重視するという考え方は、現在にいたるまで一度も途切れることなく、教育の基本方針として採用され続けている⁶。

では、それまでの教育をひっくり返すような教育改革はどのように成し遂げられたのだろうか。なかでも、一見すると実用性に乏しくプロフェッショナルの育成とは関係ないように思われる学究と思索を重視する教育は、どのような教育の理念に支えられながらCGSCの隅々にまで行き渡り、どのような改革の方法によりながら揺り戻しを起こさずに定着したのであろうか。

先行研究において1980年代のCGSC改革は、段階を追って教育水準を高めていく多層的な構造に発展したCGSCのなかの教育コースのいずれか一つに注目するかたち

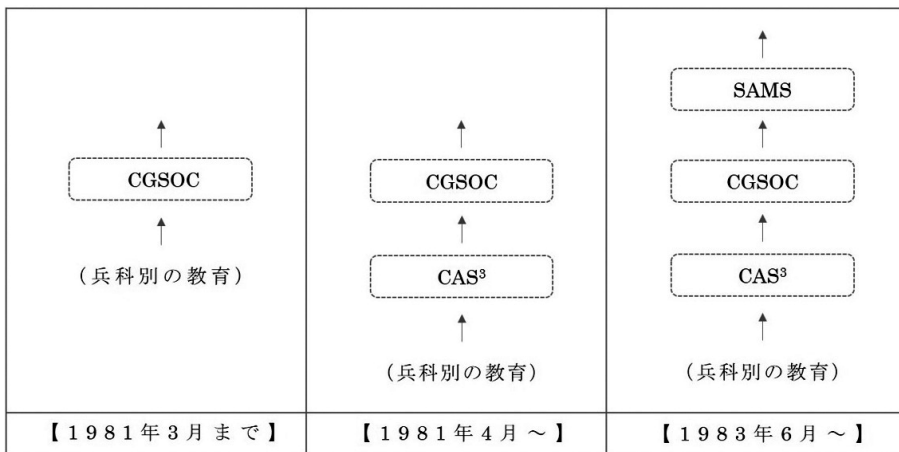
3 CGSCの改革が重要と考えられていたことが分かる研究は次のとおり。Department of the Army, "Professional Development of Officers Study vol. 1," Washington, D.C.: GPO, 1985; David D. Haught, "Officer Personnel Management in the Army: Past, Present and Future," Carlisle Barracks, Pa.: U.S. Army War College, 2003; William M. Donnelly, "Professionalism and the Officer Personnel Management System," *Military Review*, vol. 61, no. 5 (May-June 2013).

4 木下幸祐「将校の育成とミリタリープロフェッショナルリズム——1970年代の米国陸軍指揮幕僚大学における教育哲学の変化」『安全保障戦略研究』第3巻第1号 (2023年2月) 121-122頁。

5 CGSC, "A Report of the United States Army Command and General Staff College 1984-85 Institutional Self-Study," Ft. Leavenworth, Kans.: CGSC, 1985, pp. 18-19; Department of the Army, U.S. Army Command and General Staff College, "CGSC Circular 351-1: United States Army Command and General Staff College Catalog (Academic Year 1987-1988)," Ft. Leavenworth, Kans.: CGSC, 1987, p. 4.

6 冷戦終結から現代までの期間、アメリカ陸軍の役割、ならびにその作戦のあり様や進め方など、戦争にまつわる事柄は時間の経過とともに移り変わった。それにもかかわらず、学究と思索を重視するという考え方はCGSCの基本方針として採用され続けている。Department of the Army, U.S. Army Command and General Staff College, "CGSC Circular No. 351-1: United States Army Command and General Staff College Catalog (Academic Year 1987-88)," Ft. Leavenworth: CGSC, 1987; Department of the Army, U.S. Army Command and General Staff College, "CGSC Circular No. 351-1: United States Army Command and General Staff College Catalog (Academic Year 1994-95)," Ft. Leavenworth: CGSC, 1994; U.S. Army Command and General Staff College, "CGSC Circular No. 351-1: United States Army Command and General Staff College Catalog (Academic Year 1998-99)," Ft. Leavenworth: CGSC, 1998; U.S. Army Command and General Staff College, "CGSC Circular 350-1: U.S. Army Command and General Staff College Catalog (2020-2021)," Ft. Leavenworth: CGSC, 2021.

で議論されてきた。1980年代、国防予算の増額を受けて、CGSCのなかに新しいコースが立て続けに設けられた。1981年4月、伝統的な指揮幕僚将校課程（Command and General Staff Officer Course: CGSOC）の下位に、諸兵科協同幕僚校（Combined Arms and Services Staff School: CAS³）が設立された。さらに1983年6月には、CGSOCの修了に引き続き1年間の追加教育を授ける、いわば修士課程に相当する高等軍事研究校（School of Advanced Military Studies: SAMS）が置かれた。これまでの研究ではCGSOCかSAMSのどちらか片方に焦点が当てられており、ここでは、CGSOCの教育は1980年代を通してどのように改められたのかという問題、あるいは新設のSAMSではどのような教育が行われたのかという問題が論じられている⁷。（図1を参照）



CAS³ : 少佐昇進前のすべての将校が履修

CGSOC : 任官年度が同じ将校のなかから選抜された40パーセントが履修

SAMS : CGSOCを履修中の将校のなかから選抜されたごく一部が履修

図1 1980年代のCGSCにおける教育構造の多層化

（出所）筆者作成。

7 1980年代のCGSOCについて論じた代表的な研究は次のとおり。Michael D. Stewart, “Raising a Pragmatic Army: Officer Education at the U.S. Army Command and General Staff College, 1946–1986,” Ph.D. diss., University of Kansas, 2010; Janine Davidson, *Lifting the Fog of Peace: How Americans Learned to Fight Modern War* (n.p.: University of Michigan Press, 2011); Richard M. Swain, “Filling the Void: The Operational Art and the U.S. Army,” in B. J. C. McKercher and Michael A. Hennessy, eds., *The Operational Art: Developments in the Theories of War* (Westport, Conn.: Praeger Publishers, 1998). SAMSについての代表的な研究は次のとおり。Kevin C. M. Benson, “Educating the Army’s Jedi: The School of Advanced Military Studies and the Introduction of Operational Art into U.S. Army Doctrine 1983–1994,” diss., University of Kansas, 2010; Kevin C. M. Benson, “School of Advanced Military Studies Commemorative History 1984–2009,” Ft. Leavenworth, Kans.: CGSC, 2009; Jeffrey J. Goble, “Wants and Needs: SAMS Relationship with the Army,” Ft. Leavenworth, Kans.: CGSC, 2008; Huba Wass de Czege, “The School of Advanced Military Studies: An Accident of History,” *Military Review*, vol. 89, no. 4 (July–August 2009). 厳密に言うとSAMSという呼び名が用いられたのは1985年以降であり、1983年には高等軍事研究プログラム（Advanced Military Studies Program）と呼ばれていた。本稿は、広く使用されているSAMSの名称を用いる。Benson, “Educating the Army’s Jedi,” p. 103.

しかし、そうした先行研究のアプローチでは、1980年代におけるCGSC教育の変化が、CGSCのなかのコースを見渡したかたちでは明らかにされてこなかった。ここに議論の余地が残されている。

そこで本稿は、教育構造が多層化していく過程のなかの区切りとなるそれぞれの時期で、プロフェッショナルの育成に関してどのような考え方がすべての教育コースに共通していたのか、あわせて、どのコースから、どのようなやり方で学究と思索を重視する教育がCGSCの全体に広げられ定着したのかという点に注目する。第一節はCAS³とCGSOCの二段階で教育が行われた1980年代初頭について、第二節はCAS³からSAMSまでの三段階で教育が行われた1980年代の中盤から終わりまでの期間について検討する。結論では、それまでに明らかにした事項をひと続きのものとして捉え、これにより学究と思索を重視する教育への変革を支えた教育の理念と改革の方法論を、CGSCのなかのコースを見渡したかたちで描き出すことを試みる。そのうえで、この教育改革が示唆することについて、いくつかの考察を提示したい。

1. 1980年代初頭：その後の改革の基礎となった教育理念と方法論の誕生

(1) 1970年代への反省からの出発

1981年4月のCAS³設立を境として、CGSCの教育はCAS³とCGSOCの二段階で行われるようになったが、この頃から二つの新しい考え方がCGSCの内部に広がりはじめた。その一つは、CGSCでは論理的に考える能力を何よりも優先して修得させなければならないという考え方であった。もう一つは教育法についての考え方であり、それは、知識や技術を授けるだけの教育法では論理的に考える能力を修得させることも伸ばすこともできない、したがってCGSCではそうしたやり方とは異なる教育法を用いなければならないという内容であった。

新しい考え方は、1970年代後半にCGSCに広められた教育にまつわる考え方への反省をよりどころとしており、この反省が呼び水となって広がったものであった。知識や技術を与えてさえいればおのずから人間の考える力は伸びていくという、1970年代後半の考え方は間違っていた。この誤りのために、現在のCGSCの教育は、論理的に考える力を身につけさせることをおざなりにしているのも同然となっており、とてもプロフェッショナルな将校を育成しているとは言えない。このように考えられていた。

1970年代後半の教育は、訓練ドクトリンコマンド(Training and Doctrine Command: TRADOC)初代司令官のウィリアム・デピュイ(William E. DePuy)大將が制度化したものであった。彼は、戦闘の指揮や平時の業務に直接的に役立つ知識や技術を、プロフェッショナルな将校が身につけなければならない専門的能力のなかでとりわけ優先すべきものと位置づけた⁸。さらに、彼は、そうした実用的な知識や技術の修得に専念させておけば特に働きかけなくても学生の思考力は伸びていくと言い張り、自身の考え方をCGSCに押しつけた⁹。デピュイの影響力は、彼が1977年に退役した後も衰えなかった¹⁰。

しかし、1980年代に入ると、デピュイの考え方にしたがって行われていたCGSCの教育は、考える力の修得とはかけ離れていると酷評され始めた。1982年2月、陸軍省のガイ・メロイ(Guy S. Meloy)少將は陸軍参謀総長に宛てて、CGSCのなかの伝統的なコース、つまりCGSOCが、10ヶ月の教育期間で教えることができる限界に無頓着な詰め込み教育となってしまうと報告した。1970年代後半に実用に向けた教育に重点が置かれた結果、CGSOCのカリキュラムには役に立つと思われる知識や技術を教え込む授業が毎年追加され、教育する内容は増加する一方であった。メロイは、そのような教育を「1マイルの幅と1インチの深さ」と形容した¹¹。このほか、授業のほとんどが1人の教官が60名の学生を相手にする講義形式で行われ、それぞれの授業では、基礎的な知識や物事を行うときの決まったやり方を暗記したかどうかを確認するテストが繰り返された¹²。

デピュイの考え方を見直した人物は、奇しくもデピュイの在職中には彼のもとで手腕を振るい、ついにはその後継者となったドン・スターリー(Donn A. Starry)大將であっ

8 木下「将校の育成とミリタリープロフェッショナルリズム」111-115、117、120頁。

9 John L. Romjue, Susan Candy, and Anne W. Chapman, *Prepare the Army for War: A Historical Overview of the Army Training and Doctrine Command, 1973-1993* (Honolulu: University Press of the Pacific, 2002), p. 23; Robert E. Shea Jr., "An Examination of Credibility in Military Education," *Military Review*, vol. 55, no. 3 (March 1975), pp. 84-85.

10 1978年に陸軍省が実施したアンケート調査の結果は、①陸軍将校の間には事務処理に秀でる人物を高く評価する気風が広がっていること、②多くの高級将校がCGSCは実用的な知識と技術を教え込むことに専念すべきだと考えていることを示しており、デピュイが退役した後も彼の考え方は広く支持されたことが伺える。Headquarters, Department of the Army, "A Review of Education and Training for Officers vol. 1 An Overview," Washington, D.C.: GPO, 1978, pp. L-2-10 to L-2-12.

11 Guy S. Meloy, "Memorandum thru Deputy Chief of Staff for Operations and Plans for Chief of Staff, United States Army, Subject: Evaluation of CGSC Curriculum, Tab C," Washington, D.C., Office of the Deputy Chief of Staff for Operations and Plans, dated 1 February, 1982, pp. 1, 3.

12 Stewart, "Raising a Pragmatic Army," pp. 276, 294, 308. ほかに①教官陣の能力がおそろしく低い、②教育者としてふさわしくない将校が配置されている、③学生が教官を尊敬していないという指摘がある。Meloy, "Evaluation of CGSC Curriculum, Tab C," p. 2; Huba Wass de Czege, "Final Report: Army Staff College Level Training Study," Carlisle Barracks, Pa.: U.S. Army War College, 1983, p. 8; Stewart, "Raising a Pragmatic Army," p. 258.

た。TRADOC 第二代司令官に就いたスターリーは、陸軍の将校は既知の業務を要領よくこなすことはできるが、その反面、未知の問題、すなわち次の戦争をどのように戦うかという問題、あるいは軍の改革で何を成すべきなのかといった問題を、新しいコンセプトを生み出して解決する能力が欠落しており、このことが軍の改革を妨げていると判断した。スターリーは、そうした能力は論理にかなう方法で考え抜くことではじめて獲得できるものであり、今後は、考えさせる教育によって学生を知的に鍛えることをCGSCの最も重要な役割としなければならないと繰り返した¹³。スターリーは、自身も一翼を担ったデピュイの改革を省み、CGSC教育を抜本的に見直さなければ陸軍が立ちゆかなくなると考えたのである。

(2) 新しい教育の理念を他に先駆けて具現した新設校 CAS³

スターリーが自身の考え方を実際にかたちにする場所として選んだのは、新設校のCAS³であった。当時、CGSCの教授陣には、大学内の問題について外部から干渉を受けることを拒む人物が少なくなかった。スターリーは、彼らとの路線対立が原因でデピュイのCGSC改革はつまずき、軍の改革が混乱したと分析した¹⁴。そこで彼は、周縁部から働きかけた¹⁵。それは、伝統的にCGSCの中心的コースであるCGSOCについては学校長以下の校務運営に委ね、その傍ら、教育の考え方から実際に用いる教育法までのすべてを改めたCAS³を設立し、その後、この新設校を糸口にしながらか数年間をかけて自身の考え方とそれをかたちにした教育法をCGSOCに広げていくというやり方であった¹⁶。

自身の考え方を具現するため、スターリーは、CGSCの監督責任を持つTRADOC司令官の立場から、CAS³が開校するまでの過程に積極的に関与した。そのなかでスターリーは、二つの指針を出した。第一の指針は、論理的に考える力の修得と向上に専念せよという内容であり、第二は、考える力を伸ばすという目標に見合った教育法

13 スターリーは、自らの主張を、陸軍戦略大学 (Army War College) での研究会や陸軍機関誌『ミリタリーレビュー』誌で繰り返した。Lewis Sorley, ed., "Press On!: Selected Works of General Donn A. Starry vol. 1," Ft. Leavenworth, Kans.: Combat Studies Institute Press, 2009, pp. 111–112; Donn A. Starry, "To Change an Army," *Military Review*, vol. 63, no. 3 (March 1983), p. 26.

14 Stewart, "Raising a Pragmatic Army," pp. 301–302. スターリーは退役後のインタビューで、1970年代後半にCGSC学校長を勤めたジョン・クシュマン (John H. Cushman) 少将、ならびにクシュマンのアドバイザーであり、30年にわたりCGSCで教授職に就いたイバン・ビルラー (Ivan J. Birrer) 博士について、デピュイやTRADOCに対して非協力的であったのみならず、話し合いさえも受け付けないほどに独善的であったと苦々しく回顧している。Lewis Sorley, ed., "Press On!: Selected Works of General Donn A. Starry vol. 2," Ft. Leavenworth, Kans.: Combat Studies Institute Press, 2009, pp. 1111, 1125–1127.

15 Ralph Ekwall and Roland D. Griffith, "Constructing a Cube: A History of the Combined Arms and Services Staff School," Ft. Leavenworth, Kans.: Combined Arms and Services Staff School, CGSC, 1994, p. 1–7.

16 Sorley "Press On! vol. 1," pp. 111–112; Sorley "Press On! vol. 2," pp. 1127, 1212–1213.

にひたすら集中せよという内容であった。

第一の指針について、CAS³は幕僚を養成する学校であったが、スターリーは、論理的に思考する能力を、幕僚が業務を遂行するうえでの基礎中の基礎、かつ幕僚としての良し悪しを左右するものと位置づけた。同時にスターリーは、幕僚の業務で役立つ知識や技術についての情報量を増やすことを教育の目標とはさせなかった¹⁷。この結果、講義形式の授業はCAS³から取り除かれた。知識や技術を授ける教育はすべて、入学前の学生が自習形式で履修する通信教育で行われた。CGSOCとは異なり、CAS³は詰め込み教育にならなかった¹⁸。

第二の指針についてスターリーは、CAS³を、学生一人一人が自主的に思考し、かつ他の学生と共同作業や討論を行うなかで思考する、能動的で双方向的な学習プロセスとすることを目指した。このため、彼は①教官の指導のもとで少人数の学生が主体的に発表や討論、もしくは研究を行うゼミナール形式の授業の導入、②そうした教育のやり方にふさわしい見識と人格を備えた教官の選抜と配置を命じた¹⁹。この結果、CAS³でのすべての授業は、12名の学生で構成されるグループを単位として行われ、それぞれのグループには、過去の大隊長勤務で高い評価を受けた中佐が専属教官として配置された。9週間の教育期間を通してグループの編成は変更されず、学生たちには何が問題なのかを明らかにすること、その解決策について話し合うこと、選択した解決策の妥当さについて論理立てて説明することが毎日のように求められた。専属教官は、教壇のうえから知識や技術を授けるだけのCGSOCの教官とは正反対であった。専属教官は、配置されたグループが受けるすべての授業を任されていたが、その役割は、討論の進行役やまとめ役となって学生の良い見本となること、あるいは、学生の様子を毎日つぶさに観察して一人一人の思考力のレベルや性格にあわせた助言を与えるこ

17 幕僚としての基礎的な能力について、スターリーは、①複雑な現実の事象を、それを構成する要素に分けて解明する分析的思考力、②分析的思考で得られたいくつかの要素によって、別々のものをまとめる総合的思考力、③抽象的な思考によって物事の本質を理解し、かつ個別の事象や経験の持つ意味を解釈する概念化能力、④個別の特徴と物事の本質、あるいは末端と全体を要約する説明能力と定義した。Ekwall and Griffith, "Constructing a Cube," p. 1-7. 知識や技術を教えることは目標ではなく、思考する能力を伸ばすことが目標であるというスターリーの考え方は、その後も長く受け継がれており、1990年代になってもCAS³の教官陣は「思考することについて学ぶ場所」あるいは「何を考えたらいいかではなく、どのように考えるのかについて教える学校」という表現で、自分たちの学校を『ミリタリーレビュー』誌で説明している。J. Steve Patterson, "CAS³: Investment in the Future," *Military Review*, vol. 74, no. 5 (May 1994), pp. 25-26; Albert E. Bryant and Joan Dietrich Silver, "CAS³: Fifteen Years Later," *Military Review*, vol. 76, no. 6 (November-December 1996), pp. 67-68.

18 Robert Van Steenburg III, "What's a 'Cass Cube'?" *Military Review*, vol. 61, no. 5 (May 1981), pp. 25-26; Michael R. Anderson, "Evaluating CAS³ Instruction," *Military Review*, vol. 64, no. 7 (July 1984), pp. 28, 34. 新しい知識や技術の教育をカリキュラムに追加したほうがいいという意見は、CAS³の教育に関する基本的な考え方とは矛盾するという理由で却下された。

19 Ekwall and Griffith, "Constructing a Cube," p. 1-7.

とによって、学生の考える力を伸ばすことであった²⁰。

スターリーの考え方は、CAS³の教育を支持する高級将校に受け継がれ、1980年代中盤からのCGSC改革の基礎となった。スターリーは、自身の考え方をかたちにしたCAS³を設立したが、その3ヶ月後にTRADOC司令官の職を離れ、さらにその2年後の1983年に退役した。このため彼はCGSCの改革を見届けることはできなかった。スターリーの理念を継承した代表的人物は、スターリーがTRADOC司令官に就いていた時にCGSC学校長を務めていたウィリアム・リチャードソン(William R. Richardson)中将と副校長ロバート・フォーマン(Robert H. Forman)少将であった。この二人は、CGSCを監督する役職を1980年代の後半まで歴任し、スターリーの考え方を広げていった²¹。

2. 1980年代の中盤から終わりまで：先鋭化した教育理念とその制度化

(1) 予測困難なほどの変化が早いペースで起こる時代への危機感

1983年6月にSAMSが設置されてCGSCは三層の教育構造に改められたが、この頃、スターリーの思想を先鋭化させた考え方が広がりはじめた。それは、CGSCでは論理的に思考する能力をさらに高い水準まで引き上げなければならないという考え方であった²²。

この考え方は、このままだと陸軍は科学技術や社会の発展がもたらす戦争の進化に適応できない組織になってしまうという危機感が現れ出たものであった。まだスター

20 Steenburg III, "What's a 'Cass Cube'?" pp. 26–27; Anderson, "Evaluating CAS³ Instruction," pp. 27–28. 少人数制の教育が特に重視されたことは、教育施設の設計や教官の資格要件からも伺える。CAS³の校舎には収容人数が12名の教室だけがあり、それ以上の人数の学生を収容できる教室や、講義形式の授業に使用できる大講堂はなかった。また、教官には、学生にとっての憧れの存在となることが要求された。Bryant and Silver, "CAS3: Fifteen Years Later," pp. 67–69.

21 フォーマンは、1979年から1981年6月までCGSC副校長を勤めたが、この期間中、CAS³設立の責任者であった。彼は、スターリーとともに少人数制の教育の実現に力を尽くした。リチャードソンは、1979年10月から1981年8月までCGSC学校長を勤めた。CAS³についてブリーフィングを受けたリチャードソンは強い関心を持ち、フォーマンを積極的に後押しした。Ekwall and Griffith, "Constructing a Cube," p. 1-6. リチャードソンは、CGSC学校長を離任した後は、1983年3月まで陸軍省でCGSCの監督責任を持つ作戦担当陸軍参謀次長(Deputy Chief of Staff for Operations and Plans)を、そして1986年6月に退役するまでCGSCを直接監督するTRADOC司令官を歴任した。リチャードソンはCGSC学校長就任から数えて7年連続でCGSCの改革に関与できる役職に就いてリーダーシップを発揮した。同様、フォーマンは、CGSC副校長を離任した後は、1983年7月から1985年7月まではTRADOC参謀長の立場から、1985年7月から1987年8月まではTRADOC副司令官の立場からCGSC改革を後押しした。Romjue, Candy, and Chapman, *Prepare the Army for War*, pp. 151–152, 162, 167–168, 173, 180, 186.

22 CGSC, "1984–85 Institutional Self-Study," pp. 45–46. このほか1985年に陸軍省が作成した報告書も、将校の育成においては、その判断力を向上させて戦争の進化に対応することが重要であると結論付けている。Department of the Army, "Professional Development of Officers Study vol. 1," p. IV.

リーが TRADOC 司令官に就いていた頃、CGSC 学校長リチャードソンと彼のもとで教官を勤めていたフーバ・ワス・ド・セーゲ (Huba Wass de Czege) 大佐は、戦いが進展していく速度や兵器の性能が過去とは比較にならないほどに向上していること、ならびに戦いの様相やその進め方の移り変わるペースが年々速くなっていることに注意を払った。彼らは、予想もできないほどに大きく、かつ目まぐるしく戦争が変化するなかでは、戦場の指揮においても平時の業務においても判断の誤りは壊滅的な結果を招く、したがって将校一人一人の考える力をもっと高めなければ陸軍は次の戦争に勝利することはできないと結論付けたのである²³。

リチャードソンとセーゲは、論理的に思考する能力をさらに高い水準に引き上げるためには、もう一度 CGSC の教育を改め、自らの頭脳で考え抜くという意味でこれまで以上に厳しく学生を鍛えなければならないと考えた。これをはっきりと言い表したのはリチャードソンであった。1983年3月に TRADOC 司令官に就任したリチャードソンは、CGSC の教官陣に向けて、学生たちの思考力の質を高めることが最重要の課題であり、そのためには基礎的な知識や型通りのやり方を教え込むだけの機械的な教育を取り除かなければならないと訓示した²⁴。

リチャードソンとセーゲが CGSC 教育の刷新を試みた点は、二つあった。その第一は、戦争や軍事力行使を学問としての作法に則って学ばせ、そして、その学問 (以下、「用兵学」) を修めさせることであった。第二は、CGSC をこれ以上はできないというほどまで能動的で双方向的な学習プロセスに作り替えることであった。

用兵学について、リチャードソンとセーゲは、軍事的な事象について解釈や分析、総合を行うときの枠組みであり、判断力を強化するものと説明した²⁵。その内容は①軍事力の行使にまつわる理論や概念を用いながら事実の観察を行い、観察によって得られた知識を体系立てて事実を解釈し、最終的には個々の事実を説明できる理論や抽象的に思考するための概念を創り出していく研究、②どのような軍事的、または社会的な条件のもとでどのような戦いの進め方が奏功したのか、そして、条件がどのように

23 CGSC 学校長に就いていた時、リチャードソンは、① CGSC の教育は知識や技術を教え込むだけでは不十分であり、それらを現実に応用する能力を向上させなければならない、②卒業後の業務を要領よくこなす将校を育てるのみならず、将来の将官としてふさわしい思考様式を備えた将校を育てなければならないと述べている。William R. Richardson, "The Leavenworth Influence on Today's Army," *Military Review*, vol. 61, no. 5 (May 1981), p. 17. 同様に、セーゲは、CGSC のみならず陸軍省や TRADOC でも広く読まれた研究報告書のなかで、CGSC がより高い思考力を備えた卒業生を毎年送り出すことによってはじめて、陸軍は素早く、かつ柔軟に戦争の進化に対応できる組織になることができると説明している。Czege, "Final Report," pp. 4, A-6 to A-8.

24 Stewart, "Raising a Pragmatic Army," p. 270.

25 William R. Richardson, "Kermit Roosevelt Lecture: Officer Training and Education," *Military Review*, vol. 64, no. 10 (October 1984), p. 33; Huba Wass de Czege, "How to Change an Army," *Military Review*, vol. 64, no. 11 (November 1984), pp. 34, 45-46.

変わったときにその戦い方の進め方は効力を失ったのかに焦点を当てた軍事史の研究の二つに要約できる。セーゲは、用兵学を自分のものとするにより、従来のやり方を変えなければならないことを察知する力、ならびに状況の変化にあわせて新しい戦い方を生み出すための判断力が強化されると説明した²⁶。つまり、用兵学は、理屈ばかりで実際の業務では役に立たない将校を生み出す教育と見做されず、むしろ次の戦争での勝利に向かって陸軍を牽引する実務家を育てる教育として位置づけられたのである。この点についてセーゲは「いつの時代も真に優れた実務家は、きまって用兵学によく通じている」と述べている²⁷。

CGSCをさらに能動的で双方向的な学習プロセスに作り替えることについて、リチャードソンとセーゲは、CGSOCでの教官1人あたりの学生数をもっと少なくすること、ならびに見識と人格の面で優れているだけではなく学問的な意味での知的な訓練を受けた教官をCGSOCに集めることが重要かつ不可欠だと判断した。1983年の初め、CAS³の教育が高い評価を得たことを受けて、CGSOCでも少人数制教育がゆっくりと広がり始めていた。講義形式の授業は減り、代わって、1人の教官が12名ないし15名の学生を教育する討議形式の授業が増加した²⁸。リチャードソンとセーゲは、1人の教官が5名ないし6名を教育する形式がCGSOCにはふさわしいと考えた。また、セーゲは、教育の良し悪しを決めるのは、何を教えるか、つまりカリキュラムの内容ではなく、誰が教えるかであると信じて疑わなかった。彼は、教官の資格要件として、①修士号以上の学位保有者であること、②過去の教官および部隊指揮官としての勤務とともに優秀と評価されていること、③少なくとも向こう3年間継続して教官として勤務できることの三つが必要だと考えた²⁹。

(2) 既存の人事制度から離れた SAMS

スターリーがCAS³で自身の教育理念をかたちにしたのと同じように、リチャードソンとセーゲは、中心的なコースであったCGSOCではなく、その外部に新しく設立したSAMSで自分たちの教育理念を実際の教育として具現した。CGSOCの上位に置

26 Czege, "Final Report," pp. A-6 to A-8; Czege, "How to Change an Army," pp. 34-35, 39-40. セーゲは、CGSOCの卒業生を例に挙げて、彼らは知識や技術を授けるだけのやり方で育てられたため、まるでクッキーの抜き型のような教条的な解決法しか持ち合わせておらず、状況に応じて自身の頭脳で考えて判断する能力がまったく欠けていると説明した。Benson, "Educating the Army's Jedi," pp. 89-90.

27 Czege, "How to Change an Army," p. 45.

28 Czege, "Final Report," pp. 52, D-2. リチャードソンはCGSC学校長在任中に、CGSOCでの少人数制教育の実現に努力していた。Richardson, "The Leavenworth Influence," p. 17.

29 Benson, "Educating the Army's Jedi," p. 103.

かれた SAMS の教育は、彼らの考え方をそのままかたちにしたものであった³⁰。

論理的に考える能力をさらに高い水準に伸ばす教育を SAMS で実現するため、リチャードソンとセーゲは、既存の教育にまつわる人事制度から SAMS を切り離れた。彼らは、1人の教官が受け持つ学生の人数を減らした教育、ならびに特別に優秀な教官を集めた教育は既存の人事制度を前提とする CGSOC では実現できないと判断した。この結果、二人は、自分たちの教育理念をかたちにするため、CGSOC の外部に既存の人事制度から独立した学校を新設したのである³¹。

CGSOC には教育を授けるという機能だけでなく、同年代の将校のなかから必要な人数の優秀な人物を選抜し、そして、教育修了後には彼らを要職に配置するという機能があった。この選抜と配分の機能が、リチャードソンとセーゲの教育理念の実現を阻んでいた。CGSOC の学生数は、彼らを卒業後に配置するポストの数にあわせて、陸軍省によって毎年約 900 名と決められていた。1981 年と 1983 年に、CGSOC の少人数制教育化を推進するため、学生数を減らすという改革案が検討されたが、これは実現しなかった³²。また、そうした大所帯のコースで教官 1 人あたりの学生数を 6 名にできるほど大勢の教官を配置することは、陸軍省にとって不可能であった。この当時、徴兵制の廃止と募集難に対応するため、リクルート部門や予備役将校訓練課程 (Reserve Officer Training Corps)、あるいは新規入隊者の訓練所にも優秀な将校を配置することが少なからず必要であった³³。

リチャードソンは、陸軍省と粘り強く交渉し、SAMS では教官 1 人あたりの学生数を 6 名に維持すること、ならびにとりわけ優秀な教官を配置することを認めさせた³⁴。CGSOC と異なり、SAMS の学生数は優秀な教官を何人確保できているかによって決まった。SAMS の学生には教育修了後に師団や軍団の作戦幕僚に就くことが約束されていたが、そうした卒業後のポストの数にあわせた人数を入学させることは二の次で

30 リチャードソンとセーゲはともに、SAMS について、組織立てた検討によって設立されたコースではなく、二人のアイデアによって設立されたコースであると述べている。Interviewed by Michael W. Ackerman, "Senior Officer Oral History Program, Project 1987-18, General William R. Richardson, U.S. Army Retired," Carlisle Barracks, Pa.: U.S. Army Military History Institute, 1983, pp. 318, 335; Czege, "An Accident of History," pp. 102, 104.

31 Czege, "An Accident of History," pp. 103-104; Ackerman, "Senior Officer Oral History Program, William R. Richardson," pp. 310-311.

32 Stewart, "Raising a Pragmatic Army," pp. 292-294; Richardson, "The Leavenworth Influence," pp. 16-17.

33 Czege, "Final Report," pp. 57, B-1-34. 陸軍省は 1982 年 5 月に CGSC の教官職に優秀な将校を優先して配置するという方針に改めたが、その効果は翌年になっても現れなかった。Czege, "Final Report," p. 8; Stewart, "Raising a Pragmatic Army," p. 258. このほか、TRADOC は 1980 年の部内改編の際、装備開発や訓練の改善を所掌するポストを増やすために CGSOC 教官の定数を削減していた。Stewart, "Raising a Pragmatic Army," p. 256.

34 Stewart, "Raising a Pragmatic Army," p. 306.

あった³⁵。また、SAMSの教育は、CAS³と同様、12名の学生で構成するグループを単位として行われたが、各グループには1年間の教育期間を通して専属教官が配置されるのみならず、それぞれの授業では教育する内容について高い専門性を備えた博士号保有者が配置された³⁶。また、リチャードソンからの強い要請を受けて、陸軍省は2年間という条件付きで、陸軍戦略大学 (Army War College) への入学が決まっていた3名ないし4名の中佐もしくは大佐を、毎年SAMSに配置することを認めた。セーゲは、彼らを、その1年目にはSAMSの学生と同じ内容をすべて学ばせ、その2年目には学生たちのグループの専属教官に任命した³⁷。

ほかにもリチャードソンとセーゲは、SAMSにふさわしい学生を集めるために、CGSOCとはまったく異なる、入学者の選抜と卒業後の補職にまつわる制度を陸軍省に認めさせた。当時、CGSOCへの入学者を決めていたのは陸軍省であり、その選抜過程では、それまでの勤務成績だけが評価された。これに対してSAMSでは、はじめにその校長と教授陣が選抜試験を行い、その後、学校側が適格と認めた候補者のなかから陸軍省が入学者を決定するという方式が採用された。選抜試験では、ジレンマを含む軍事的な問題の解決策について答える小論文の作成および面接が行われ、①論理的に考える力、②自身の主張を論理立てて説明する力、③たとえ階級が上位の相手であっても反対意見には論じ返すことができる意思の強さが評価された³⁸。また、卒業後の補職について、CGSOCの卒業生にはその後の昇進を有利にするポストに配置されることが約束されていた。これに対してSAMSの卒業生は、CGSOC卒業生と比較すると1年間多く教育を受けていたにもかかわらず、卒業後の補職ではCGSOCの卒業生とまったく同じように扱われた。この結果、キャリアを有利にすることを動機とする学生はSAMSへの進学を避け、代わって、論理的に考える力を伸ばすことを渴望する学生が集まった³⁹。

35 実際、1986年に学生数を増加する計画が持ち上がったが、この計画は、優秀な教官が足りないという理由により中止された。Interviewed by Brent Bankus, "Senior Officer Oral History Program, An Oral History of Leonard Donald Holder, Jr., U.S. Army Retired," Carlisle Barracks, Pa.: U.S. Army Military History Institute, 2015, pp. 59–60; Benson, "Educating the Army's Jedi," pp. 103–105.

36 Benson, "Educating the Army's Jedi," pp. 92–93; Interviewed by Steven G. Fox, "Senior Officer Oral History Program, Project 2001-12, Colonel (Retired) Richard Sinnreich," Carlisle Barracks, Pa.: U.S. Army Military History Institute, 2001, pp. 36–37.

37 Benson, "Educating the Army's Jedi," p. 92; Romjue, Candy, and Chapman, *Prepare the Army for War*, p. 37; Bankus, "Senior Officer Oral History Program, Leonard Donald Holder," p. 319.

38 Benson, "Educating the Army's Jedi," pp. 26–28; Fox, "Senior Officer Oral History Program, Richard Sinnreich," p. 37.

39 Michael D. Wylie, "Educating for War," *Marine Corps Gazette*, vol. 72, no. 4 (April 1988), p. 28. 学生のなかには、CGSOCで受ける教育は重要ではなく、CGSOC入学者に選抜されること、ならびに卒業証明書を得ることの二つだけが重要であると考える者が少なくなかった。Stewart, "Raising a Pragmatic Army," pp. 306, 308.

他方、教育の側面では、SAMSはCGSOCを基礎としながら段階を追って教育の水準を高めていくように設計された⁴⁰。例えば、作戦ドクトリンについての教育では、CGSOCでは現行のドクトリンが定める方法論やその背景にある軍事理論を理解したうえで、これらを陸軍が最も重視する事態、つまり欧州でのワルシャワ条約機構軍との戦いに応用できることが目標であった。これに対してSAMSでは、現行ドクトリンの学習のみならず、結果的にその改定につながるほどの、軍事力の行使について深く考え抜く研究が行われた⁴¹。SAMSの学生たちは、近代以降の軍事理論や概念を用いながら大規模な陸上戦役についての軍事史研究を行い、さらに、そうした研究の成果をもとに次の戦争をどのように戦うべきかを検討した。1986年、陸軍の作戦ドクトリンが改訂されたが、この新しいドクトリンの草稿は、SAMSの学生たちが代々引き継ぎながら4年間をかけて書き上げたものであり、そのなかには作戦術（operational art）という新しいコンセプトが含まれていた⁴²。

結論

1980年代、学究と思索を重視する教育がCGSC内に行き渡るのを支えた教育の理念は、①プロフェッショナル育成のためにCGSCが果たさなければならない最も重要な役割とは、論理的に思考する能力を伸ばすことであるという考え方、②論理的に思考する能力は学究と思索によってはじめて伸ばすことができるのであり、知識や技術を教え込むだけの教育法では決して向上しないという考え方であった。この新しい教育理念は、教育構造の多層化にともなって先鋭化した。

この教育理念は、これを最初にかたちにしたCAS³の教育が高く評価されたことにより、その影響力を強めていった。CAS³は、新しい教育理念の有効性を実証し、1980年代中盤以降におけるCGSC改革の基礎となったと言える。1980年代の初め、スターリーは、論理的に考えて未知の問題を解決できる能力こそが次の戦争に備えるうえで最も重要だと考え、能動的で双方向的な教育にふさわしい見識と人格を備えた

40 Christopher L. Baggot, "The School of Advanced Military Studies in the 21st Century," Ft. Leavenworth, Kans.: CGSC, 1998, pp. 27–28. アメリカ陸軍の教育改革を注意深く観察していたアメリカ海兵隊のマイケル・ウィリー（Michael Wyly）大佐も、1988年、SAMSでの最高水準の教育を可能にしている理由はCGSOCがSAMSの基礎となっているからであると述べている。Wyly, "Educating for War," p. 30.

41 Czege, "Final Report," pp. 4, F-4 to F-5.

42 Swain, "Filling the Void," p. 164; Bankus, "Senior Officer Oral History Program, Leonard Donald Holder," pp. 47–49. 作戦術については、齋藤大介「戦争を見る第三の視点——『作戦術』と『戦争の作戦次元』」戦略研究学会『戦略研究 12』（2013年1月）；齋藤大介「AirLand Battle 再考——軍事思想の観点から」航空自衛隊幹部学校『鵬友』第37巻第6号（2012年）を参照。

教官をCAS³に集め、そこで自身の教育理念を忠実にかたちにした。その後、スターリーの理念を受け継いだ高級将校たちが、さらに高い水準にまで論理的に考える力を伸ばすためにSAMSを設立したのである。

1980年代を通して、学究と思索を重視する教育をCGSCに定着させるために使用された方法は、例外なく、CGSCの中心的なコースであったCGSOCに直接手を入れるのではなく、その外部に新しい教育コースを追加し、そこから学究と思索を重視する教育を広めていくという迂回的な方法であった。そうした方法を採用した目的は、教育の理念を損なわないことにあった。周縁部に新設したコースでは、新しい教育の理念を忠実にかたちにすることができたのである。既存の教育と折り合いをつけるような方法は選択されなかった。

CGSCにはそれまで続いてきた状態を維持しようとする、いわば変化を嫌う側面があり、このため、その中心部であるCGSOCから改革を広げていくという方法を選択した場合、新しい教育の理念やそれをかたちにした教育が既存の教育やこれにまつわる制度によって中和されることは避けられなかった。なかでも、CGSOCの学生数は彼らが卒業後に配置されるポストの数にあわせて決められており、毎年およそ900名の学生が教育を受けていたことは、少人数制教育の実現を阻んだ。そうした背景があったため、CGSCの中心部のCGSOCからではなくその周縁部の新設コースから、高級将校が自分自身であれこれ力を尽くすかたちで新しい教育は広がっていったのであった。

1980年代のCGSCの教育改革では抜本的な改革が成し遂げられたのだが、その過程は、周縁部で教育の理念を忠実に制度化することから始め、そこでの成功により支持と勢いを獲得し、理念をさらに発展させて再び忠実に制度化するというものであった。軍人の保守的な気質を言い表した言葉に、いつの時代も軍人は次の戦争は前の戦争と同じようになると考えるという言葉がある⁴³。あわせて、軍の構造が複雑になった現在、軍の改革はますます一筋縄ではいかなくなっている。1980年代のCGSCで採用された改革の進め方は、現代にも通じる、次の戦争に備えるうえでの教訓を示唆していると思われる。

(陸上自衛隊)

43 Michael C. Thomsett and Jean Freestone Thomsett, *War and Conflict Quotations: A Worldwide Dictionary of Pronouncements from Military Leaders, Politicians, Philosophers, Writers and Others* (North Carolina: McFarland and Company, 1997), p. 112.